『松江竹枝』訳注（四）

要木純一

附録　附録

代某女寄阿郎　長歌　某女に代わりて阿郎に寄す　長歌

（52）嘗泛墨水月　嘗て泛ぶ　墨水の月
月下初相逢　月下　初めて相い逢う
嘗伴東台花　嘗て伴う　東台の花
花底情話濃　花底　情話濃し

この長歌は、松江ではなく東京で作られたもの。おそらく（新）吉原の芸者にたのまれて、遠地にいる愛人（阿郎）に代わりに手紙で送った詩。「阿郎」については先述。「寄」は、人に託して送ること。現代中国語と同じく、郵送したということであろう。長歌は、もとは声を長く引く歌のことであるが、ここでは、七絶等の短詩に対して長編の古詩をいう。四句ずつ韻が換わっているので、それにあわせて分段し、解説する。

むかし、あなたと隅田川に舟を浮かべて遊びました。水面には月が映っていた。その月にてらされて、私達初めて出会ったのでした。それから、上野寛永寺の花見にお伴したこともありましたね。花の美しく咲きにおう下で、私達は深い愛を語り合ったことでした。

「墨水」は、隅田川の雅称として、江戸時代より使われている。（『国』）「東台」は、関東の台嶺の意で、上野寛永寺のある上野の山の異称。（『国』）そして、隅田川や寛永寺が現れるということは、この女が、近くの（新）吉原の妓女であることを暗示する。「月下」には、男女の縁を取り持つという神、「月下老人」（『続幽怪録』）も意識していそうだ。「初相逢」、南宋、劉学箕『蕭長公来訪す。・・・』「海山尚お憶う初めて相い逢いしを」。「花底」といえば、白居易『琵琶行』「間関たる鶯語花底に滑る」。「底」は、「下」に同じ。「月下」の「下」に対して、反復を避けた。「情話」は、本来心のこもった会話のことであるが、俗語では、多く男女間の睦言を指す。陶潜『帰去来の辞』「親戚の情話を悦ぶ」。「情」字につられて、「情話」が「濃」いといったのだと思う。

花月為媒介
遂得持巾櫛
巾櫛取周歳
情交日親密

花月　媒介と為り
遂に　巾櫛を持するを　得
巾櫛　取りて周歳
情交　日に親密なり

その花と月が仲立ちとなって、あなたの身の回りの世話をさせてもらえるようになりました。ひたすらお仕えして一年間、二人の熱い愛は日に日に深まっていきました。

花と月が、最後まで、二人の恋において重要な役割を果たす。花と月は、妓楼の象徴でもある。「花月」、王勃『山扉花月の下』。「媒介」は、人と人との仲立ちだが、『春秋左氏伝』桓公三年の杜預注に「（桓）公は媒介に由らず、自ら斉侯と会して而して昏を成すは、礼に非らざる也」とあるように、古くから、男女の結婚の仲立ち、仲人を指す。「遂」は、とうとうの意ではなく、かくして、くらいの意。「巾櫛」は、手ぬぐいと櫛。入浴の道具。人の妻となり、そばで起居の世話をすることの喩え。『左伝』僖公二十二年「巾櫛に侍執す」。大森惟中は、朱筆で、「遂得持巾櫛」を「遂得侍巾櫛」（遂に巾櫛に侍するを得）に、「巾櫛取周歳」を「巾櫛執周歳」（巾櫛執りて周歳）に改めよという。

典拠の左伝の文が、「侍執」といっており、後世もそれに倣って、「侍」や「執」を動詞として伴う場合が慣用だからであろう。「周歳」、一周年。白居易『府酒・変法』「自ら慚づ府に到りて未だ周歳ならざるに」。「情交」、謝霊運『山居賦』「情交の永く絶ゆるを顧う」。男女の愛を多く指す。「親密」、嵇康『家誡』「当に親密を極むべからず」。

花月復促別
一朝値苦離
離杯和涙酌
陽関曲声悲

花月　復た別れを促す
一朝　苦離に値う
離杯　涙に和して酌み
陽関　曲声悲し

ところが、その花と月がまた別れを促したようで、ある日、苦しい離別を迎えることになりました。別れの杯を、涙と共に飲み下す、その折しも陽関曲が悲しめとばかりに奏でられたのでした。

「促別」、李咸用『従兄の京に入るを送る』「無頼の厳風は別觴を促す」。「苦離」、杜甫『清明』「干戈未だ息まず離居に苦しむ」。「離杯」、庾信『斉使に対宴す』「酒正離杯促す」。「和涙」は、詩でよく使う語だが、厳密には解しかねる。流した涙が酒に混ざることか。白居易『暁別』「我に送れ涙を和する酒」。あるいは、「和」は、俗語的用法の「・・・とともに」という意であろうか。范成大『周徳万・・・』「一杯涙に和して江天を飲む」。「陽関曲」は、王維『元二の安西に使いするを送る』詩のこと。その結句に「西のかた陽関を出でなば故人無からん」とあるによる。古来、別れの席で歌われる詩。「曲声悲」、陸游『城上』「巴曲声悲しく腸を断つに怯ゆ」。

忍難忍之情
割難割之愛
江頭解纜去

忍び難き　之情を　忍び
割き難き　之愛を　割く
江頭　纜を解きて去り

心腸為欲碎　　心腸　為に碎かれんと欲す

抑えがたき感情を抑え、とても別れられないという愛する気持ちを何とか切り裂いて、私達はお別れしました。川のほとりで、あなたの舟がともづなをほどいて出立したとき、私の胸はそれはもうもうずたずたになってしまいそうでした。

「忍難忍之情」、徐陵『仁山深法師の道を罷むるを諫める書』「能く忍び難きを忍びて、方めて其の最を知る」。多分に仏教的な言葉。「割難割之愛」、蘇軾『范蜀公に与うる六首』其四「忍び難きの愛を割く」。南宋、李光『亡子を悼む詩』「恩深き父子は情割き難し」。「江頭」の、頭字は場所を示す接尾辞。劉禹錫『竹枝詩』「江頭の蜀客蘭橈を繫ぐ」。「解纜」、江淹『謝法曹贈別』「纜を解きて前侶を候う」。「心腸」は、はらわた、転じて胸の内。韓愈『孟東野を送る序』「その心腸を思愁す」。「心腸為欲碎」、高適『封丘県』「官長を拝迎するに心碎かれんと欲す」。少し大げさな言い方。「為」は、その別れのために。

大森惟中は、「忍難忍之情、割難割之愛」を「忍他難忍情、割此難割愛」（他の忍び難き情を忍び、此の割き難き愛を割く）に改めよと勧める。意味に変わりはない。二字＋三字＝五字の句の構造を崩さない方がよいと考えたのだろう。

咫尺亦復関　　咫尺も　亦た復た関す
況是隔商参　　況んや是れ　商参を隔つるをや
商参仮令隔　　商参　仮令い隔たるとも
不隔妾衷心　　妾の衷心を　隔てず

ホンのすぐそばでも、なんやかや邪魔が入ってなかなかあえなくて苦しんだのに、商星と参星ほど二人の距離が離れてしまった今ではもうどうしようもない。いえ、商星と参星はあえなくても、私のまごころはいつまでもあなたのおそばにあるのよ。

「咫尺」、「咫」は八寸、「尺」は十寸、要するに非常に近い距離。『淮南子』道応「天威咫尺なり」。「商参」、「商」はサソリ座あたりの星座、「参」は参宿、オリオン座の三つ星を中心とする星座、東西に現れて一緒に出ることがないので、顔を合わせることのない譬えとなる。杜甫『衛八処士に送る』「人生相い見ざれば、動もすれば参と商との如し」。「商」は、本来別字であるが、「商」と同様に使う。大森惟中は正字の「商」をすすめる。「亦復」と「況是」は呼応して、抑揚の語気となっている。「仮令」、『史記』管晏列伝賛に「仮に晏子をして在ら令めば」。いわゆる反実仮想として用いる。「妾」は、女性の謙称。めかけではない。「衷心」、『三国志』蜀、法正伝「衷心常に凛凛たり」。

大森惟中は「咫尺亦復関、況是隔商参」を「翹企不可望、天涯隔商参」（翹企するも望む可からず、天涯商参を隔つ）に改めよと朱筆する。「亦復」等のくだくだしさを嫌ったか。「翹企」、翹も企もつまだてる、転じて待ち望む意。『三国志』呉、周魴伝「翹企に勝えず、万里命を託す」。「天涯」、王勃『杜少府の任に蜀州に之くを送る』「天涯比隣の如し」。つま先だってあなたを見ようとしても見えない。あなたは遠い空の果て、商星と参星ほど隔たっているのですから。また、「仮令」を「雖相」に変えよという。「もしも遠く離れたとしても」という仮定ではなくて、商星と参星とは、そして女と男とは、現実で既に遠く離れているのだから、かく表現せよというのであろう。

大森惟中の「咫尺亦復関」に対する添削に「一別・・・」と書いて、縦線で抹消しているところがあるが、他の字が判読不能なので臆測を慎む。

尊貌宛在目　　尊貌（そんぼう）宛（あた）かも目（め）に在（あ）り
何日又相見　　何（いず）れの日（ひ）か　又（ま）た相（あ）い見（み）ん
朝昏拝撮影　　朝昏（ちょうこん）　撮影（さつえい）を拝（おが）む

旦暮俟魚厂　　旦暮　魚厂を俟つ

あなたの立派なお姿が眼前に浮かぶよう。いつになったら再びあえるの。朝晩、お写真を拝見しております。朝晩、いにしえの魚や雁の故事にあるように、お便りが来るのをお待ちしております。

「尊貌」、『礼記』祭法「宗廟なる者は、先祖の尊貌也」。先祖のみたまのような、仰ぐべき、尊いすがたというのが本来の意であるが、日本語ではご尊顔などと同じく、尊敬語として広く用いられるようになった。（『国』）「宛在目」、柳宗元『裴行立に代わりて鎮を移すを謝する表』「旧壌宛も目前に在り」。陸游『歳暮感懐。・・・』「龍顔宛も目に在り」。瞼の裏や目の中に見えるという気持ちかも知れない。「撮影」は、明治時代から用いられるようになった和製漢語。（『国』）ここは、現代語と少しく異なって、「撮った影」すなわち写真のこと。「厂」は「雁」。日本特有の略し方。「魚雁」は、魚書雁足すなわち書信のこと。中国では古来、魚や雁は遠くから手紙をもたらしうるものとされた。「魚書」、蔡邕『飲馬長城窟行』「客遠方従り来り、我に双鯉魚を送る。児を呼びて鯉魚を烹しむに、中に尺素の書有り」。「雁足」は、前漢、匈奴に捕らわれた蘇武が、雁の足に手紙を結びつけて消息を知らせたという伝説による。（『漢書』蘇建伝附蘇武）

魚厂有報艶陽天　　魚厂　報いる有り　艶陽天
嫦娥好結花姻縁　　嫦娥　好んで結ぶ　花姻縁
観月悽然観花泣　　月を観れば　悽然　花を観れば泣く
夜夜朦朧月如煙　　夜夜　朦朧として　月は煙の如し

ゆく春の季節、あなたからの魚雁の便りをやっと頂きました。今、月を見て物思いに耽っていますが、月の女神はほんに花々の縁、そして男女の縁を取り持つのがお好きらしい。（かつてあなたと初めてあったときも月が照ってい

ましたっけ）でも不安でたまらないの。月を見ては何とも言えない悲しい気持ちになり、花を見てはなぜか涙がこぼれちゃう。毎夜毎夜、景色はぼやっとしていて、月はもやがかかっているかのよう。それが今の私の気持ちです。

この部分、実はよく分からぬ。無理矢理筋を通して解釈してみたが、自信がない。

「有報」は、魚や雁ですら、返事をくれるのに、あなたは、と男をなじる気持ちかも知れない。杜甫『重ねて何氏を過ぎる』五首其一「将軍報書有り」。陶潜『飲酒』二十首其二「積善報いる有りと云う」は、報酬の意。「艶陽天」は華やかな晩春の季節。杜甫『数ば李梓州に陪して江に泛ぶ。女楽の諸舫に在る有り。戯れに艶曲を為る』二首其の一「競いて明媚の色を将て、眼を艶陽天に偸む」。「嫦娥」は、もと「姮娥」、漢の文帝の名の恒を避けて、嫦の字が作られ、のちに「ジョウ」の俗音ができた。月の世界に住む仙女。（『淮南子』覧冥訓）。この「嫦娥」または「姮娥」が、花の姻縁を結ぶというのが、出典があるかどうか知らない。「花姻縁」の語も不審。ここも、花の仲立ちはするのに、私達人間の仲立ちはしてくれないという怨み節かも知れない。「悽然」は、悲しむさま。『荘子』漁父「客悽然として容を変う」。高適『除夜の作』「客心何事ぞ転た悽然たる」。「朦朧」は、ぼんやりとしたさま。ここは、前句を承けて、涙で月や花がにじむという気持ちもあるか。李嶠『早に苦竹館を発す』「朦朧たる煙霧の暁」。「月如煙」は奇矯な表現。「煙月」（もやのかかった月）というところを、超現実的に表現したか。

大森惟中は「夜夜朦朧月如煙」を「花色暗澹月如煙」（花色暗澹として月煙の如し）に改めよという。花がどす黒く闇に沈んでいくさまか。月だけではなく、花にも言及しなくては、前句や冒頭に対応しないということであろう。

失題写昔人夢境　原十五首

（53）酒渇眠醒合歓被　　酒に渇きて　眠りは醒む　合歓の被
　美人分与銀杯水　　美人　分け与う　銀杯の水
　釵尖帽角影交叉　　釵尖　帽角　影は交叉す
　月上梅窓香霧裏　　月は　梅窓に　上る　香霧の裏

失題。昔の人の夢境を写す。原十五首

題は失われた。昔の人の夢の世界を描写した。もと十五首の連作のうちの一首。「昔人」が不審。今と違って、昔の人はこうだったということか。例えば、昔の遊廓は夢の世界のようで、興趣があってよかったというように。それとも、「むかしのひとのそでのかぞする」の如く、昔の恋人を指すか。「夢境」、寒山詩「夢境復た何をか為さん」。「失題」というのも、夢の世界であるということを強調する虚構かも知れぬ。王維や李商隠に「失題」詩あり。李商隠は、彼の多くの「無題」詩同様わざとそう題したのであろう。

酒の飲み過ぎで喉が渇いて、二人仲良く睡っている布団の中で、男は眠りから覚める。すると、美しい芸者が起きて銀のコップに水を汲んできてくれた。それから、簪の先と帽子の端の二つの影がひっついて一緒になる。薫り高い霧の中、梅の影が映った窓に、月がゆっくりとのぼっていく。

上声「豉」韻の七絶拗体。「酒渇」、「眠醒」は、杜甫『軍中醉歌。沈八劉叟に寄す』の「酒に渇きて江の清きを愛す」と「冷石醉眠醒む」の二句を明らかに意識。「合歓被」、『古詩十九首』「裁ちて合歓被を為す」。「釵尖」、「帽角」は、詩語としてはあまり見ない。それらを用いて、闇の中で、むつみ合う男と女のひそかごとを、新奇なそして繊細な表現で描こうとしたのであろう。「釵尖」は、明代の医薬書『普済方』（朱橚撰）に「釵尖を用いて挑起す（ほじくる）」とあるように、普通はかんざしの髪に挿す方のとがった部分。しかし、それが影になるというのは、おかしい。飾りの部分のそのまた尖端といったような、微細な表現を試みたのだろうか。「帽角」、「帽簷」と同じく帽子のふちのことであろうか。平仄の関係で「簷」を「角」に換えたのか。とがったかどという意味の「角」はそぐわないような気がする。南宋、欧陽澈『是の日天気乍ち晴れ、頗る人の意を快くす。因りて世弼を拉して傅嵒に謁す』「袍襟帽角紅塵に走る」の用例あり。具体的にどのような形の帽子をイメージすればよいのか分からないので、確かなことは分からない。「交叉」は詩語としてあまり見えない。交叉点というように、「交叉」は十字に交わるニュアンスだが、ここは顔を近づけあった男女の動きに合わせて、その影も一緒になるという趣向であろう。「梅窓」は、庭に面した梅が見える窓のことであろう。南宋、施枢『高家店に別る』「月は梅窓を照らして夢を為すこと遅し」。「香霧」とい

えば、杜甫『月夜』「香霧雲鬟湿おう」。范成大『浣渓沙』「錦地繡天香霧の裏」。

大森惟中の眉批。

西廂余響。　西廂の余響。

「西廂」といえば、元稹撰の唐代伝奇小説『鶯鶯伝』。女主人公鶯鶯が恋する張生を誘う時の詩に、「月を待つ西廂の下」と詠む。男女の秘密の恋を題材とした小説。その影響下にこの詩が生まれたのだろうと大森惟中はいう。さらに『鶯鶯伝』をもとにして作られた元の王実甫の雑劇『西廂記』をも意識するか。「廂」は、日本の「ひさし」ではなく、母屋に対する脇部屋。女性が住む。妓楼遊びを、あたかも実際の男女や夫婦の恋愛であるかのように作った点が手柄だということであろうか。「余響」は、本来音楽の残響のことであるが、後世いつまでも影響が残ること。嵇康『琴賦』「余興を泰素に飄す」。朱熹『鉄笛亭』「千載余響を留む」。

この詩の直後につけられた大森惟中の評は、

窓間偸覷月娥、梅妃恐不勝妬嗔。　窓間月娥を偸み覷る。梅妃は恐らく妬嗔に勝えざらん。

この男は浮気者。ことの最中に、窓から月の嫦娥神を盗み見ようとは。梅の妃は、多分嫉妬の怒りで身もだえしていることだろうよ。

という、例によっておふざけ調のもの。「偸覷」、王建『宮詞』「身を側だてて偸み覷る正南の山」。「月娥」は、嫦娥のこと。月の擬人化。「梅妃」は、歴史上では唐玄宗妃。後に、楊貴妃に寵を奪われた。勿論ここは梅の擬人化。「妬嗔」、陳子龍『結交絶交行』「言う莫れ宮に入りては妬嗔多しと」。

『松江竹枝』の最後には、朱筆で大森惟中の跋が附されている。

明治戊子十二月大尽前二日　解谷樵史大森惟中妄評多罪。

惟中　妄評多罪。

明治戊子十二月大尽前二日　解谷樵史　大森

明治二十一年（一八八八）、つちのえねのとし、十二月二十九日　解谷樵史　大森惟中　好き勝手な批評をして申しわけない。「大尽」は、本来陰暦における大の月（三十日）のことだが、ここは大晦日、つごもりというつもりか。さらには、太陽暦の十二月三十一日のことだと思うがどうか。「妄評」は謙遜、「多罪」はお詫びの言葉。「妄言多謝」や「妄評多罪」は、日本では頻用するが、中国では用例が少ないようである。（「多罪多罪」等はよくいうが）

＜参考資料＞

筆者は、研究ノート「『松江竹枝』の作者篠田謙治について―その履歴と『山陰新聞』所載の漢詩」（山陰研究（1）［二〇〇八・十二月］）で、この『松江竹枝』所収の詩が、当時の『山陰新聞』（島根大学図書館所蔵の山陰新聞［マイクロフィルム］（日本マイクロ写真発行））に掲載されていることを指摘し、作者精軒痴史の本名が篠田謙治であることを解明し、彼の履歴で現在分かる限りのことを紹介した。

以下、読者の便のために、この研究ノートと内容が重なる部分が多いが、『松江竹枝』と『山陰新聞』所載の篠田謙治＝精軒痴史の詩などとの校勘を附して、参考に供したい。

Ⅰ　『松江竹枝』翻刻と校勘

どの詩が『山陰新聞』に見えるか、各首の次に「＊校」として附記した。番号は引用に便ならしめるために振ったもの。「山・松」等の略称は、後に引く当該文の初めに注記している。大森惟中の評は、【眉批】、【評】で示した。【改】は大森惟中の修改した部分である。旧字、異体字、修改部分など、原文を髣髴させるように翻字をするのはなかなか難しかった。細かな点は、『影印　松江竹枝』（要木純一編輯　二〇〇九年二月）所載のカラー写真で確かめて

ほしい。『松江竹枝』自体の略称は「松」とする。

●【表紙左上】

松江竹枝　五十二首長歌一首

【本文】

松江竹枝　原一百五十首

精軒癡史草

絃歌声湧水之涯。花満高楼月満街。多少遊人来集此。碧雲湖上小秦淮。（1）

松江湖、一名碧雲湖。

＊校　山・松【1】。マイクロフィルムでは「此」字と結句缺。

垂楊垂柳澹烟遮。髣髴絃声蘇小家。好是湘簾春不捲。満江絲雨酒旗斜。（2）

＊校　山・松【2】と思われるが、全句缺。琴【1】。

楼上筵収歌管少。朦朧烟月懸桜杪。尨児吠影夜将闌。悄々隔花人語小。（3）

【眉批】青邱遺韻。小字押得湊巧。

【批】花陰撼帨、不怪尨也一吠。尨亦道個畜生。

＊校　山・松【3】と思われるが、全句缺。

落花撩乱多於雨。漠々軽陰籠繡戸。睡起春人情尚慵。低絃試按梨園譜。（4）

＊校　山・松【4】。「戸」「睡起春人情尚」「譜」以外缺。

一簇烟霞杳靄間。紅雲欲墜午風閒。青楼唱出安来曲。社日桜花砥上山。（5）

全詩用俚歌語。○曲名云安来（ヤスキ）節。○砥上山有安来。○砥上山別書十神山。
＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。
社日桜花簇綺羅。十神山上景光多。青楼置酒能留客。例唱安来謡冶歌。（6）
＊校　山・竹【4】。
隔簾咲語尚喃々。姉妹三更眼未緘。知有明朝看花約。燈前相倚製春衫。（7）
＊校　山・松【6】。
恰是冰魚味美時。扁舟載妓漾漣漪。晩来停棹何辺好。神女祠前月如眉。（8）
冰魚、松江名産。○松江湖山有辨天祠。
【評】女能蕩舟、眉能伐性、可畏、可畏。
＊校　山・松【5】承句缺。結句の「神女祠前」缺。「月如眉」を「月似眉」に作る。琴【2】も「月如眉」を「月似眉」に作る。「月似眉」の方が平仄は合う。
江天無月夜冥々。烟火趁涼轟迅霆。忽地鬨然人喝采。一丸砕作満空星。（9）
【改】忽→忽
【眉批】無月冥夜、反襯満空星、巧甚。誦至末句、亦絶叫喝采。
【評】霆是鍵屋、丸是玉屋。
＊校　山・松【12】。承句「忽」は大森惟中が改めたように「忽」に作る。
月色満城風露滋。踏歌声湧夜闌時。尋常詞曲厭陳腐。争唱安来新竹枝。（10）
安来、地名。
【評】結似第六首。改案為可。
＊校　山・松【18】。承句「湧」は「裏」に作る。琴【3】。転句「古詞旧曲嫌陳腐」に作る。
愁思引客倚青楼。月冷庭梧暗露浮。挙首悽然低首泣。三年此地値中秋。（11）

＊校　山・竹【1】。

長天漠々水悠々。暮北朝南一葉舟。今夜阿郎何処宿。白蘋紅蓼満湖秋。（12）

【眉批】古調澹蕩。

＊校　山・松【19】

松江好景属軽鳧。浅水蘆花活画圖。今時無復季鷹興。惆悵秋風湖上鱸。（13）

鱸魚、松江名産。

【評】披活画、捉活花、何為張翰帰思。

＊校　山・松【20】。自注なし。

阿孃迎客送新居。玉椀盛来開宴初。笑道僻郷珍味少。松江名物便鱸魚。（14）

＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。

阿爺曽化薩山霜。慈母三年在病床。心事告君々憫否。半生流落滞斯郷。（15）

＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。

匆卒徴姫々未来。悄然無復笑顔開。阿孃慣客能解事。柑子一盤先侑杯。（16）

土俗呼妓為姫。

【改】阿孃慣客能解事→阿孃解事善嬌客

【「解」字に対して】失声。

【評】真個可憐孃、不煩拍手再々。

＊校　山・松【14】。起句「匆卒徴姫猶未来」。承句、「笑」字缺。

戸隙風寒未出幃。鴛鴦被底笑相依。多情最是今朝雪。留得阿郎不放帰。（17）

【評】定是濃茶的熱契。

＊校　山・松【22】。

絃歌声絶夜方央。酔歩蹣跚欲下廊。纎手挽衣何所説。請看楼外万甎霜。（18）

＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。

雨絲風片暗江城。滑々泥途不可行。知是遠村先有雪。街頭処々売山鯨。（19）

＊校　山・松【21】。自注（山鯨猪俗称）。琴【4】。転句「遠」を「辺」に作る。

街上人呼河洛行。竈頭沸々煖煙生。硝燈影白往来断。風鐸霜寒夜半声。（20）

【改】河洛→河漏

【評】賤商入詩、才思沸々。

＊校　山・松【23】。承句「煙」を「烟」に作る。自注（河洛蕎麦□一名）。

絃管筵収伴後房。癡情擬学両鴛鴦。朱唇先試相思草。分与餘煙笑属郎。（21）

【評】初会情致如観、不知当夜烟量如何。

＊校　山・松【16】。結句「与」を「得」に作る。自注（相思草煙草別名）。

甕碗陶杯漫献酬。俗人何解愛嬌喉。此間尤厭殺風景。酔漢頻争豁指頭。（22）

【眉批】争豁改挑拇如何。

＊校　山・松【15】。起句「碗」を「椀」に作る。承句「尤」を「最」に作る。自注（豁指頭拇戦一名）。

香夢驚醒客下楼。佳人相送説離愁。低声更就耳辺語。果是明宵能到不。（23）

＊校　山・松【17】。起句「鴛枕夢醒客下楼」に作る。

昨夜燈前約偕老。無端好夢至巫山。朝来頻被同儕艶。纎指新穿瑪瑙環。（24）

瑪瑙、松江物産。

【眉批】実況実叙。

＊校　山・松【9】。承句「好」字缺。自注なし。

傷郎至竟憶郎情。只願莫違三世盟。私語未終天欲暁。生憎善導寺鐘声。（25）

善導寺、松江寺院之名。
＊校　山・竹【9】。自注なし。

詠声妓　原六十首

茂春（シケハル）　景山春女　伯州之産
自註　角盤山在伯耆〇春女曽与良人不適、竟棄児而去焉。余不詳其假真。
鐘情昨弄掌中珠。一去当年思到無。夜半頻啼呼子鳥。角盤山上月痕孤。（26）
【改】鐘→鍾
＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。
好（ヨシ）　山根与志女
唱出嬌喉艶冶歌。評声品色果如何。名呼好好連呼耳。司馬先生到処多。（27）
【眉批】司馬作水鑑如何。
＊校　山・綿【5】（与志）。妓女の本名を示す自注はなし。以下同様。
婀娜纖腰擎者誰。閨情宴楽両相宜。縱饒弱柳無任侠。畢竟東風逗此枝。（28）
＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。
愛次　田原猶女　大阪之産
昨夜海棠微雨過。一顰一笑意如何。沈淪情況君休説。自古佳人薄命多。（29）
＊校　山・綿【8】（愛次）。荘二に相寿という妓女を詠む。同一人物か。
花梅（ハナムメ）　中山阿照
夜々劉郎踏雪来。狭斜場枕碧江隈。清香艶色有人識。臘裏占春花是梅。（30）

＊校　山・綿【10】（花梅）。花梅は荘にも詠む。

朝霧（アサキリ）　松江阿千代

朝霧時病眼、故及。

三生石上結良縁。互約後宵契已堅。咫尺情郎看不見。朦朧朝霧罩簾前。（31）

【眉批】宛然須磨巻光景。

＊校　山・竹【13】朝霧。朝霧は浅桐として荘二にも詠む。

花扇（ハナアフキ）　太田阿満　松江藩士女

繡閣詼諧逸興多。唱来一曲八杉歌。芳心持贈画花扇。不是情人可奈何。（32）

【評】扇上所画、無乃朝顔花

＊校　山・綿【2】（花扇）。

玉鶴（タマツル）　安龍寺阿常

九天高舞意悠々。一曲清歌弄玉喉。仙客騎遊何処是。碧雲湖上小揚州。（33）

＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。後述の松江竹枝詞（佐川半醒）に米鶴を詠むが、関係あるか。

初君（ハツキミ）　糸賀阿末

千紅万紫本紛々。一片芳心初見君。今夜情郎猶未到。花傷風雨月傷雲。（34）

＊校　山・綿【6】（初君）。起句は「数行紅涙是斯文」に作る。承句「芳」は「丹」に作る。初君は荘二にも詠む。

竹（タケ）子　垣本阿品　舞妓

敲鼓淵々飄舞裙。風狂雨劇耐辛勤。看他紅紫紛紜裏。瀟洒清姿抽此君。（35）

＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。

小升　山本充女

鬱居十載独傷神。夜夜巫山入夢頻。未語真情我先識。性来矜重属斯人。（36）

【評】矜重傷神人、宜傾小升酒、一掃鬱愁。

＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。

市吉（イチヨシ）　川上唯女　出雲杵築之産

自註　市吉曽与画工金山鴎隣互約伉儷、情交親密、故及。

一日不看奈病癯。宵々只有苦中娯。阿郎舐筆画何状。写出鴛鴦比翼圓。（37）

【改】圓→圖

＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。荘二に市由という妓女を詠む。同一人物か。

絲児（イトジ）

朱唇舐筆写相思。餘墨又描新月眉。児繋色絲牽万客。絲児真箇是情児。（38）

【改】児繋色絲→嬌態纏綿

【評】蜘蛛女怪、応避三舎。

＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。荘に糸治という妓女を詠む。同一人物か。

綾子　広部瀧女

自註　以古川柳為一篇。

阿爺一去奈慈親。菽水頻愁逼赤貧。恨殺佳人多薄命。綾羅錦繡却纏身。（39）

＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。

亀二　舟引充女

奇遇一宵話情状。蓬莱夢穏聞幃帳。假将其類作相求。果是阿郎名六蔵。（40）

【評】六蔵不是矢口渡恋阿舟人。

＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。

歌吉（ウタキチ）　佐々木歌女

花柳場中寄此身。清歌妙舞不同倫。請看浮薄狭斜裏。能解人情有幾人。（41）

【眉批】真詣悟機。

＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。歌吉は佐川半醒の松江竹枝詞（一八八四（明治十七）年五月二十五日『山陰新聞』　雑記）にも詠む。

愛吉（アイキチ）

自註　愛吉酡顔、媚靨可愛。〇転絃用俚歌語。

嬌靨酡顔笑勧觴。早収絃子入蘭房。似他情味大和柿。一啖香甘不可忘。（42）

【改】絃→結

【評】熟柿紫爛、須戒放啖。

＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。荘にも愛吉を詠む。

富（トミ）子　長澤阿辰　浪花之産

自註　富子幼来松江、夙有才色之名、傍能裁縫、転結故及。

此地数年猶未帰。宵々紅涙漂閨幃。憐君青女繡秋手。好為阿郎縫錦衣。（43）

＊校　山・竹【12】富子。「富子。浪華之産。幼来松江。夙有才色之名。傍能裁縫。転結故及。」と、ほぼ同文の後注有り。

又

富子之情人、偶在藝州、故及。〇厳島在藝州。

楼上夢驚蜀女魂。杜鵑泣血欲黄昏。阿郎今夜何辺在。厳嶋祠前月一痕。（44）

＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。

力長（リキチャウ）　比企阿充　松江藩士女

自註　七年流落、力長自語人者。〇阿充為父母鬻技者。

桑滄之変独空傷。只喜双親猶在堂。至孝佳人天未幸。七年流落滞斯郷。（45）

＊校　山・綿【1】（力蝶）。

鶴（ツル）子　増田於初

越王楼閣唱呉謳。声似九皐弄玉喉。一自此君留此地。人間此処小楊州。（46）

【眉批】与玉鶴同趣。要改作。

＊校　山・綿【7】（鶴子）。承句「似」を「不」に作る。恐らく誤り。

素絲（シライト）　増田宇能女

皓歯明眸傷此身。落花流水奈前因。素絲一縷長千尺。繋得橋南橋北人。（47）

＊校　山・綿【3】（素絲）（素一作白）。

小蝶（コテウ）

花間比翼結春盟。思起東西別後情。舞翅翩々一何重。娥眉顰顧露無声。（48）

＊校　校　『山陰新聞』にこの詩なし。

若柳（ワカヤキ）

葉如嚵眼含濃露。絲似愁腸遮澹烟。濯々香薫春月柳。多情顧影自相憐。（49）

【改：「嚵」字の旁が「虎」であったのを正す】

＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。

若梅（ワカウメ）

素服淡粧纏此身。孤清潔白自無塵。春風未入趙郎夢。能耐雪霜有幾人。（50）

【評】淡粧孤潔。恐是老梅、非若梅。

＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。

駒吉（コマキチ）　片山阿国

三年斯地寄斯軀。挙首長鳴低首吁。一顧未曽逢伯楽。同槽伏櫪奈龍駒。（51）

【改：「軀」字の旁が「巳」であったのを正す】

＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。

附録

代某女寄阿郎　長歌

嘗泛墨水月、々下初相逢。嘗伴東台花、々底情話濃。花月為媒介、遂得持巾櫛。々々取周歳、情交日親密。花月復促別、一朝値苦離。々杯和涙酌、陽関曲声悲。忍難忍之情、割難割之愛。江頭解纜去、心腸為欲砕。咫尺亦復関、況是隔商参。々々仮令隔、不隔妾衷心。尊貌宛在目、何日又相見。朝昏拝撮影、旦暮俟魚厂。々々有報艶陽天、嫦娥好結花姻縁。観月悽然観花泣、夜々朦朧月如煙。（52）

【改】遂得持巾櫛→遂得侍巾櫛

【改】々々取周歳→々々執周歳

【改】忍難忍之情、割難割之愛→忍他難忍情、割此難割愛

【改】咫尺亦復関、況是隔商参→翹企不可望、天涯隔商参

【改】仮令→雖相

【改】夜夜朦朧月如煙→花色暗澹月如煙

＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。東京での作であろう。

失題写昔人夢境　原十五首

酒渇眠醒合歓被。美人分与銀杯水。釵尖帽角影交叉。月上梅窓香霧裏。（53）

【眉批】西廂余響。
【評】窓間偸覷月娥、梅妃恐不勝妬嗔。
＊校　『山陰新聞』にこの詩なし。
【大森惟中の跋】明治戊子十二月大尽前二日　解谷樵史大森惟中妄評多罪

『松江竹枝』所収の、全五十三首のうち、私の数え方では、三十一首が、『山陰新聞』に載せられている。次に『山陰新聞』にどのように載っているか見てみよう。

Ⅱ　『山陰新聞』等所収の『松江竹枝』

『山陰新聞』において、『松江竹枝』所収と同じ詩があらわれるのは、次のA、B、Cの三カ所であるが、その最初は、以下のものである。全二十三首のうち十八首が『松江竹枝』と重なっていると思われる。但し、著者名が篠田謙治ではないことが大問題である。

A　一九八五（明治十八）年　三月十七日　『山陰新聞』
松江竹枝（二十三首之中）　村上琴屋　＊略称：山・松
【1】絃歌声湧水之涯。花満高楼月満街。多少遊人来集□。□□□□□。
＊校　松（1）。転句「多少遊人来集此」。結句「碧雲湖上小秦淮」。
【2】□□□□□□。□□□□□□。□□□□□□。□□□□□□。＊缺
＊校　全文缺。恐らく松（2）。・従って琴【1】。
【3】□□□□□□。□□□□□□。□□□□□□。□□□□□□。＊缺
＊校　全文缺。恐らく松（3）。

【4】□□□□□□□□□戸。睡起春人情尚□。□□□□□□□譜。
＊松（4）。「落花撩乱多於雨。漠々軽陰籠繡戸。睡起春人情尚慵。低絃試按梨園譜。」
【5】□□□□□□□。扁舟載妓漾漣漪。晩来停棹何辺好。□□□月似眉。
＊松（8）。起句「恰是冰魚味美時」。結句「神女祠前月如眉」。自注あり。・琴【2】。
【6】隔簾咲語尚喃々。姉妹三更眼未緘。知有明朝看花約。燈前相倚製春衫。
＊松（7）。
【7】釵光鬢影乱紛々。寺々東風麝気薫。女伴争来賽香火。仏辺笑語弄春分。
＊松なし。
【8】楼外風光映酔顔。桃花春水夕陽間。大仙峯落杯中雪。道是松江小富山。
＊松なし。
【9】昨夜燈前約偕老。無端□夢至巫山。朝来頻被同儕艶。纖指新穿瑪瑙環。
＊松（24）。承句「無端好夢至巫山」。自注として「瑪瑙、松江物産」。
【10】欲語衆中不自由。満腔空貯別来愁。更期今夜相逢処。菅相祠前招鶴楼。
＊松なし。
【11】満地炎塵日未頽。花茶坊裏雪成堆。紅粧一笑迎客説。昨自大仙山上来。（花茶坊見夢粱録）
＊松なし。
【12】江天無月夜冥々。烟火趁涼轟迅霆。忽地闃然人喝采。一丸砕作満空星。
＊松（9）。「忽」を「忽」に作る。大森惟中改む。
【13】菅相祠辺夜色明。衣香扇影□縦横。紅裙時伴美髯過。時様金鈿鏤水晶。
＊松なし。
【14】匆卒徴姫猶未来。悄然無復笑顔開。阿嬢慣客能解事。柑子一盤先侑杯。

＊松（16）。起句「匆卒徴姫々未来」。自注として「土俗呼妓為姫」。

【15】甕碗陶杯漫献酬。俗人何解愛嬌喉。此間最厭殺風景。酔漢頻争豁指頭。（豁指頭拇戦一名）

＊松（22）。承句「此間尤厭殺風景」。自注なし。

【16】絃管筵収伴後房。痴情擬学両鴛鴦。朱唇先試相思草。分得餘烟笑属郎。（相思草煙草一名）

＊松（21）。結句「分与餘煙笑属郎」。自注なし。

【17】鴛枕夢醒客下楼。佳人相送説離愁。低声更就耳辺語。果是明宵能到不。

＊松（23）。起句「香夢驚醒客下楼」。

【18】月色満城風露滋。踏歌声裏夜闌時。尋常詞曲厭陳腐。争唱安来新竹枝。

＊松（10）。承句「踏歌声湧夜闌時」。・琴【3】。転句「古詞旧曲嫌陳腐」。

【19】長天漠々水悠々。暮北朝南一葉舟。今夜阿郎何処宿。白蘋紅蓼満湖秋。

＊松（12）。

【20】松江好景属軽鳧。浅水蘆花活画圖。今時無復季鷹興。惆悵秋風湖上鱸。

＊松（13）。自注として「鱸魚、松江名産」。

【21】雨絲風片暗江城。滑々泥途不可行。知是遠村先有雪。街頭処々売山鯨。（山鯨猪俗称）

＊松（19）。自注なし。・琴【4】。自注なし。

【22】戸隙風寒未出幃。鴛鴦被底笑相依。多情最是今朝雪。留得阿郎不放帰。

＊松（17）。

【23】街上人呼河洛行。竈頭沸々煖煙生。硝燈影白往来断。風鐸霜寒夜半声。（河洛蕎麦□一名）

＊松（20）。自注なし。

【2】、【3】、【4】はマイクロフィルムで欠けているところだが、詩の順序等から考えて、『松江竹枝』の（2）、

（3）、（4）の詩にあたると推測した。作者ということになっている村上琴屋は、島根県出身の著名な漢詩人である。今のところ、これは何かの間違いであって、篠田謙治自身の作品であったろうと考えている。（前述「『松江竹枝』の作者篠田謙治について」参照）

村上琴屋については、『島根県歴史人物事典』（平成九年十一月二十五日　山陰中央新報社）の記述を引用する。

●村上琴屋（むらかみ　きんおく）

文久元年（一八六一）～昭和七年（一九三二）

漢詩人、島根県官吏、剪淞吟社社長。

本名寿雄。明治一三年（一八八〇）松江中学卒。漢学を旧松江藩士平賀静遠に学び、後雨森精翁門下。漢詩結社剪淞吟社創立者の一人で社長もつとめたが、新潟・滋賀・岡山各県に赴任、松江に住むことは少なかった。晩年旧松江藩主松平家の家令となり、東京で没。（以下略）（石破洋氏担当）

村上琴屋の死後編まれた『琴屋詩存』にも、これらの詩のうち、四首が選ばれているが、『山陰新聞』を引き写して手を加えたに過ぎないと思う。＋Aとして次に引く。

＋A　『琴屋詩存』（一九三八（昭和十三）年三月　著者　村上寿夫　発行者　村上厳男）巻上

松江四時雑詞　原二十三首　＊略称：琴

【1】垂楊垂柳澹烟遮。髣髴絃声蘇小家。好是湘簾春不捲。満江絲雨酒旗斜。

＊松（2）。山・松【2】。缺のところか。

【2】恰是冰魚味美時。扁舟載妓漾漣漪。晩来停棹何辺好。神女祠前月似眉。

＊松（8）。結句『神女祠前月如眉』。自注あり。山・松【5】。

【3】月色満城風露滋。踏歌声裏夜闌時。古詞旧曲嫌陳腐。争唱安来新竹枝。

＊松（10）。承句「踏歌声湧夜闌時」。転句「尋常詞曲厭陳腐」。自注あり。山・松【18】。転句、松（10）に同じ。

【4】雨絲風片暗江城。滑滑泥途不可行。知是辺村先有雪。街頭処処売山鯨。
＊松（19）。転句「知是遠村先有雪」。山・松【21】。転句「知是遠村先有雪」。自注あり。

次のBは『綿美竹枝』の題のもの。「綿美」は、松江の遊廓があった「和多見」地域。当て字であろう。十首のうち、八首が『松江竹枝』と重なる。自序、跋もあって興味深い。

B　一八八六（明治十九）年三月七日　『山陰新聞』
綿美竹枝　　精軒戯草　＊略称：山・綿

松江花界之繁華。比之昔日凋落極矣。而日夜閑散束手者。居十中六七。其稀招而遊此者何人。曰土人也。曰羈客也。而羈客居多。就中東国之者多矣。而其妓籍亦多係于大阪之産者。以茲。衣帯鬟髻。頗模擬阪府。然而情妓概兼声妓。歌舞則嫺雅。天性皆婉柔。不似東方有意気也。今有咏妓之詩数首。以供衆諸一粲。拙劣請幸恕焉。

【1】桑滄之変独空傷。只喜双親猶在堂。至孝佳人天未幸。七年流落滞斯郷。（力蝶）
＊松（45）。「力蝶」を「力長」に作り、標題としている。

【2】繍閣詼諧逸興多。唱来一曲八杉歌。芳心持贈画花扇。不是情人可奈何。（花扇）
＊松（32）。

【3】皓歯明眸傷此身。落花流水奈前因。素絲一縷長千尺。繫得橋南橋北人。（素絲）（素一作白）
＊松（47）。（素一作白）なし。

【4】夢遶光明南浦濆。漂萍身似一紅裙。平生温厚即天質。艶美依稀見此（一作若）君（若君）
＊松なし。若君は荘にも見える。

【5】唱出嬌喉艶冶歌。評声品色果如何。名呼好好連呼耳。司馬先生到処多。（与志）
＊松（27）。「与志」は「好」に作り、標題としている。

【6】数行紅涙是斯文。一片丹心初見君。今夜情郎猶未到。花傷風雨月傷雲。（初君）
＊松（34）。起句「千紅万紫本紛々」。承句「一片芳心初見君」。
【7】越王楼閣唱呉謳。声不九皐弄玉喉。一自此君留此地。人間此処小楊州。（鶴子）
＊松（46）。承句「声似九皐弄玉喉」。
【8】昨夜海棠微雨過。一顰一笑意如何。沈淪情況君休説。自古佳人薄命多。（愛次）
＊松（29）。荘二に相寿という妓女が見える。同一人物か。
【9】枉唱安来謡冶歌。嫣然嬌笑奈愁何。松江慣見浪華月。眼満山河双涙多。（力彌）
＊松なし。力彌は荘二にも見える。
【10】夜夜劉郎踏雪来。狭斜場枕碧江隈。清香艶色有人識。臘裏占春花是梅。（花梅）
＊松（30）。花梅は荘にも見える。

不粋道士云、予素不解花抑（柳）情事。況於各妓之伎倆与醜美乎。蓋有如精軒氏才筆、可始使佳人重於九鼎太呂矣。唯為精軒氏所恨、在咏愛的（次）結一句。自古佳人実薄命多。然一顰一笑曲説沈淪情況者、未必可尽信焉。精軒氏莫或陥其術中乎。呵々。

Cは、「竹枝」という題のもの。14首中5首が『松江竹枝』と重なる。「精軒」の号をもとに「夢醒軒」（音読みで、むせいけん）の戯号を用いた。返り点は省略した。

C　一九八六（明治十九）年三月二十七日　『山陰新聞』
竹枝　夢醒軒　＊略称：山・竹

予在松江。三年于茲未践花柳巷。曩咏綿美竹枝。意不至筆亦不従矣。如何善画其情状。全篇。或因稗史。或因小説。想像其妓者焉。要不免有盲者窺牆之謗也矣。

【1】愁思引客倚青楼。月冷庭梧暗露浮。挙首悽然低首泣。三年此地値中秋。
＊松（11）。

【2】楼頭分袂意悽然。月白遠山欲曙天。杜宇一声鳴度処。君今正到大橋辺。「君一作郎」
自註。昔東国有妓。贈情郎徘句曰。喜美波伊摩、巨満加多阿他理、保都々岐寸、此吟一時、膾炙于人口。

【3】家貧由来雖沈淪。未許黄金贖此身。一片丹心若相訪。狭斜豈莫有情人。

【4】社日桜花簇綺羅。十神山上景光多。青楼置酒能留客。例唱安来謡冶歌。
＊松（6）。

【5】累々紅燈粲碧楼。繁絃嬌曲払江頭。風清売布祠前月。不照当年妾暗愁。

【6】呉船越舶去来頻。恨殺巫山艶夢新。今夜与君睡閨裏。不知明日契何人。

【7】空値佳辰独断腸。重陽九月菊花黄。愁重枉酌楼頭酒。泣自異郷望故郷。

【8】辛苦三年何所為。風光節物独空悲。佳人自古数奇事。此恨鶯花知不知。

【9】傷郎至竟憶郎情。只願莫違三世盟。私語未終天欲暁。生憎善導寺鐘声。
＊松（25）。「善導寺、松江寺院之名」の自注あり。

【10】一柯清影一條流。水上浮沈伴白鴎。父子三年未相見。数行紅涙落難留。

【11】幾開鸞鏡照新粧。雲鬢梳来只自傷。皓歯明眸為誰艶。空教紅涙湿黄裳。

【12】富子
此地数年猶未帰。宵々紅涙漂閨幃。憐君青女繡秋手。好為阿郎縫錦衣。
富子。浪花之産。幼来松江。夙有才色之名。傍能裁縫。転結故及。
＊松（43）。自注もほぼ同じ。

【13】朝霧
三生石上結良縁、互約後宵契已堅。咫尺情郎看不見、朦朧朝霧罩簾前。

＊松（31）。自注「朝霧時病眼、故及」。朝霧は浅桐として荘二にも見える。

【14】　小芳野

紅唇一咲百媚生。吉士懐春豈耐情。天性艶姿又清質。呼為芳野不羞名。

当時の『山陰新聞』を閲すると、篠田謙治が松江に来る少し前頃から、松江の妓楼を詠む竹枝詞やその亜流が盛んに載り始める。この気風が、篠田謙治に刺激を与えたかもしれない。詠まれた妓女の名前が共通するのが面白い。例えば、次の詩。

●一八八四（明治十七）年五月二十五日　『山陰新聞』

松江竹枝詞　　佐川半醒

李雪桜雲湾又湾。春人遂勝競来還。菅公祠外轟名者。米鶴絃声歌吉顔。

＊「歌吉」は松（41）も詠む。松（33）に玉鶴を詠むが、或いは米鶴と同一人物か。

また、荘堅渓なる人が松江の妓女達を詠んだものがあり、幾人かは、松江竹枝が取り上げた妓女と重なっている。それは、

●一八八四（明治十七）年五月二十三日『山陰新聞』　雑記　＊略称：荘

●一八八四（明治十七）年七月二日『山陰新聞』　淞涯芳譜拾遺　　荘堅渓戯　＊略称：荘二

の二つであるが、長文なので省略した。上のIで、詠まれた妓女名が共通する場合指摘をしておいた。

Ⅲ　篠田謙治の他の作品（『山陰新聞』所収漢詩）

篠田謙治は、竹枝以外に数多くの詩を『山陰新聞』に発表している。こちらは、外聞を憚るところがないのか、姓

名を公表している。これで、精軒痴史＝篠田謙治であることが解明できた。

●一八八五（明治十八）年十二月十日　『山陰新聞』

弁慶　　篠田精軒

背後鋸槌何所用。不如単策脱危艱。還因浄業当年力。打破人間生死関。

木曾義仲

誰道将相無常種。児戯平生事射騎。夙看蛟龍捲風雲。平安城裏樹白幟。物情恟々奈難治。将帥又非宗廟器。人笑楚人沐猴冠。前狼失穴雖可喜。後虎挾乙我豈安。旁観無乃襲卞荘之故智。一朝壇浦又粟津。鷸蚌両遺漁人利。君不聞呉蜀特角苦当塗。鼎足之業亦不迂。蘇山髣髴小剣閣。将軍胡不早負嵎。

●一八八五（明治十八）年十二月二十六日　『山陰新聞』

寄勝田睡僊　　精軒　篠田謙治

奇癖同縁訂会盟。忘形初不問枯栄。雄渾笑我文章拙。豊艶喜君詩調正。紅菜風軽孤蝶影。緑陰昼静晩鶯声。看他世道論心者。翻手涼炎何呈評。

寄河野苔洲

禅心如月皎無瑕。笑看栄枯世上花。不染錦城歌吹海。山陰帰臥一袈裟。

寄高橋泥舟　氏住東京牛込

迅飈振古林。繁霜摧籬菊。歳時看峥嶸。何以慰幽独。可人在平生。一見情已熟。僂指当時先。居士最奇卓。心如古逸民。仏書享清福。鎗術輝日東。書法普流俗。遠近頗称之。謝官不求禄。聞名心已慕。豈図来吾屋。嗟予在塵羈。校書直芸局。文章鳳已題。更見一尊醪。傾之如失偶。廻傷車轣轆。爾来頻相違。有若寒与燠。清縁已如許。乖斥一何速。離合固有常。眉尖動易蹙。世間為好事。須先忍蹉跎。況是文字交。不在疎与数。万里如比隣。貂尾狗可続。

而今寄詩篇。莫使音塵邈。

●一八八六（明治十九）年一月十日　『山陰新聞』

丙戌元旦作寄　　篠田精軒草

淞南松田君

和風吹徹旭旗斜。好是春光好物華。山帯浮嵐生暖翠。梅纏新雪呈嬌花。佩環声向城闉響。撃壌歌盈閭巷譁。更有一峯称仙嶽。「大山在伯耆」千秋秀色属誰家。

瑞気氤氳麗彩霞。繁華亦不異京華。江山有約先呈色。草木無情猶孕花。紫陌頌歌随処起。朱門車馬為春譁。和風吹遍文明化。万国而今同一家。

鶴契千年「千家氏兼題」

松竹満門累葉鮮。「千家氏累世長寿故及」仙禽高舞亀山巓。「亀山地名」蓬莱寄作君家物。又是春風小洞天。

寄藤祝

織綺繡霞裁綴工。年々引蔓豈終窮。長條千尺出雲樹。窈窕繁華紫半空。

松江雑詩

京坂秋風雲石春。青年空帯客衣塵。帰来只合掃墳墓。悔我東西南北人。

雲巻復舒屡変姿。山開還隠態何奇。吟哦未得上乗作。過眼雲山皆我詩。「近時有過眼録自纂」

●一八八六（明治十九）年二月九日　『山陰新聞』

（「将赴任広瀬留別不休吟社諸彦」飯島半村の詩に続いて、松田淞南以下4名が「送半村兄赴任広瀬」を作り、山本白水以下4名が「送半村飯島君赴任広瀬次其留別之韻」を作った。後者に篠田謙治が名を連ねて）

同　　篠田　精軒

旅装行看景物加。馬蹄香雪富田花。一簇紅雲低不堕。春風吹断月山霞。

●一八八六（明治十九）年三月二十三日　『山陰新聞』

春声　　精軒　篠田謙治

欲将律呂試朱絲。已聴東風動緑枝。細雨簾纎芳夢静。一檐滴瀝午陰遅。梅花落月楼頭笛。楊柳清歌席上詩。誰識狂生多感触。満山啼鳥倒尊時。

春色

遅々麗景満寰区。江碧山青似画図。日暖残烟浮遠渚。風和香雨染平蕪。烟霞粧出笙歌市。錦繡織成花柳衢。直到点紅間万緑。使人随処燃金鬚。

春夜睡覚微暖枕上口占得韻東

雪後寒還退。也知酒力融。爐薫吹睡夢。檐溜静簾櫳。梅影初春月。鐘声半夜風。清香何処至。瓶有玉玲瓏。

次が、松江に別れを告げるときに作った、『山陰新聞』所載の最後の詩。丙戌は一八八六（明治十九）年。四月念八日は四月二十八日。新暦であろう。苧坊は今の苧町（おまち）。現在の松江市役所の附近。玉造温泉に遊び、掛合町から、おそらく広島に抜けて、故郷の東京に向かったのであろうか。

●一八八六（明治十九）年五月六日　『山陰新聞』

留別松江諸子　　篠田精軒　草

客中送客涙痕多。却唱陽関三畳歌。尤是今朝留別処。綈袍恋々奈君何。

松江此去恨何頻。春過青山碧水濱。千里従今張翰興。宵々応夢到鱸蓴。

晩桜隔水映斜暉。一片丹心憶帝畿。父子三年不相見。恨遅鴻雁故郷帰。

流水落花三餞春。陽関一曲賦詩頻。離愁如此君看取。送別人為留別人
橋畔何人折贈楊。離愁心緒綫来長。寄言青帝笑吾否。今日伴春帰故郷。
丙戌四月念八日。亭午発島根郡芦坊。未時早已至意宇郡玉造。浴後起而倚欄干。客楼風物又不可言也。立賦詩数首以附稿于督郵。
人道霊泉功験多。硫烟高捲玉山阿。神医難療薬難治。名利場中幾個痾。
半日来遊積翠間。天然風物小仙寰。無人来説風塵事。臥看飛青一髪山。
峻峯突兀水潺湲。日落層嵐積翠間。禿筆一枝在吾手。写来米点幾重山。
松江留別即事
落花流水去難留。泣送東帰万里舟。橋畔柳楊垂不語。朝風暮雨管離愁。「万里別一葉」
飯石郡掛合旅亭作
緑酒紅燈亦一時。昨非今是覚何遅。春風朧月客中景。付与筆奴皆入詩。
長亭短駅弄吟毫。自覚当時詩気豪。一旦書生為税吏。割鶏何必用牛刀。
観落花有感
昨日満枝花。今朝満庭雪。清姿雖可賞。其奈過芳節。豈無茵溷殊。終然期煙滅。所以超脱人。盤楽在巌穴。
紫牡丹
人間応比紫漸郎。文彩風流圧衆芳。宸苑祥霊逢李白。長城春色笑王嬙。好呼瑞硯描長艶。莫使蘭芽妬国香。未信姚黄冠陸譜。幾篇評品費詞章。「自註陸務牡丹譜以姚黄為首」

『山陰新聞』所収の漢詩を調べる上で、『山陰新聞文芸記事総覧』明治十五年―大正元年（寺本喜徳編　島根県立島根女子短期大学国語国文会　一九九九年二月）が大変に役立った。記して感謝の意を示したい。

Ⅳ　篠田謙治の和歌

篠田謙治は、漢詩人としてよりも、歌人として知られていた人である。『明治・大正・昭和の読売新聞（読売新聞社CD-ROM）』によって、「篠田謙治」名を検索したところ、『読売新聞』の文芸関係を収めた付録版（月曜附録と題す）に彼の歌数首を見出した。歌会を主催し、自作も含めた選歌を読売新聞に寄稿したらしい。しばしば「新題」と銘打つように、明治開化の舶来の珍奇なものを題材にした歌が多い。以下、検索結果を引くが、読みやすいように原文のレイアウトや句読点振り仮名等を、改めたり省略したりしている。小竹園（しょうちくえん）は、篠田謙治の歌人としての雅号。先述の研究ノートを発表してから、更に四首を付け加えることができた。

●一八九八（明治三十一）年十月三日　『読売新聞』　附録一面

神田今川小路玉川堂開筵月並歌娯会

九月廿六日当座競点当選歌

紫式部

甲　篠田謙治

玉簾のをすの外山の雪よりも光は高し秋の夜の月

初秋虫

甲　篠田謙治

夕月の影さす庭の草かくれほのかに虫の鳴そめにけり

●一八九八（明治三十一）年十月二十四日　『読売新聞』　附録二面

小竹園月並新題競点　会主　篠田謙治　鈴木重嶺翁撰

人造麝香　篠田謙治

ひらけゆく人の工（たく）みの現れて　高き匂ひぞ世に薫りけれ

●一八九八（明治三十一）年十月三十一日　『読売新聞』　附録三面
玉川堂開筵月並歌娯会
十月廿五日当座各評高点歌
暮秋擣衣
秋深み露をも霜と置かへてうつ袖寒し夜半の狭衣　篠田謙治
古戦場
朝日影消し昔のあととへば夕霜深し粟津野の原　篠田謙治
●一八九八（明治三十一）年十一月十四日　『読売新聞』　附録一面
小竹園月並新題競点　会主　篠田謙治　鈴木重領翁選
人造麝香　篠田謙治
世の人の造る薫りも高かるを　獣にのみと思ひけるかな
●一八九八（明治三十一）年十一月二十八日　『読売新聞』　附録一面
小竹園新題月並競点　会主　篠田謙治　選者　江刺恒久君　先光清風君
蓄音機　篠田謙治
亡（なき）人のこはねを今も聞得（ききう）るは、これの器のあれば也けり
●一八九九（明治三十二）年二月二十日　『読売新聞』　附録一面
小竹園新題競点　会主　篠田謙治　久我既酔公選
◎開業提灯　篠田謙治
商業（なりはひ）のいや栄ゆべき君が代の　光を仰ぐ千々のともし火
●一八九九（明治三十二）年三月二十七日　『読売新聞』　附録三面
小竹園新題競点　会主　篠田謙治

小出粲大人選　○裸体画　●篠田謙治
麗しき膚（はだへ）を見する写し絵に　顔をそむくる人も有けり
久我既酔公選　○市区改正　●篠田謙治
市町（いちまち）の大路も今はあらたまり　世は便（たより）好（よく）ならんとすらん
●一八九九（明治三十二）年七月三日　『読売新聞』　附録二面
小竹園月次歌会兼題
夜郭公（よるのほととぎす）　篠田謙治
大方の人は眠（ねむり）し小夜中に　我独聞（われひとりきく）初ほととぎす

本訳注は
・二〇〇七―二〇〇九年度　山陰地域古典文学資料の公開に関するプロジェクト
代表者　蘆田　耕一
・二〇〇八―二〇〇九年度　歴史・文化資源を活かした「地域まるごとミュージアム」化実践プロジェクト
～島根大学旧奥谷宿舎を取り巻く「ひと・まち・なりわい」をキーワードにして～
代表者　会下　和宏　田中　則雄　竹永　三男
による成果の一部である。